校長研修だより１１２

教科の指導と生徒指導の一体化

～「毒語」について～

2023・7・5　重枝 一郎

生徒指導については校種によって持つイメージが異なる。小学校では担任がするもの。ましてや生徒指導という言葉は使わず「授業」という言葉に含まれる。私が，よく小学校から依頼されて研修をするが，内容的には生徒指導研修だが，名目は人権研修として校内的には扱われる。中学校では，基本的に学年チームでするものという意識がある。その生徒に関わるいろんな人からのアプローチを戦略として協働する。例えば，生徒指導主事と連携したり，部活動の顧問に協力してもらったり，前年度の担任の協力を得たりといった具合である。高校では係の仕事という意識が働く。だからその係に合った人物がその係をする。一部の教員の仕事というイメージが中学校よりも大きい。

生徒指導は日々の授業づくりや学級活動の根底にあるものである。今，学校現場を取り巻く環境は大きく変わっている。だからみんなで助け合って取り組んでいくイメージが大切になる。**本校は，小中高のいいところ取りをしていく。**

「改訂生徒指導提要」では，授業が「発達支援的生徒指導」の場であり，自己存在感の感受，共感的な人間関係の育成，自己決定の場の提供，安全・安心な風土の醸成などを生徒指導上の実践の視点だとしている。これがよく言われる「教科の指導と生徒指導の一体化」ということである。（校長研修だより２４・５９・７５号参照）

教科 or 生徒指導，どちらの指導力というわけでなく，一体感のあるものとして指導力を上げていくには，研修として，身近な誰かの生の授業や身近な誰かの授業ビデオを見ながら，生徒理解を深めていくことをしなくてはならない。一つの価値観だけで進めてしまわないよう，複数の教師で分析をすれば必ず有意義な時間になる。

私自身，これまでの学校で授業ビデオ方式のやり方を実践していた。授業力＋生徒指導力向上は，「質より量」の中で，それぞれのキャリア段階によっての多様な気づきを得る。だから OJT 的に行って，ちょっとした気づきから自分でトライ＆エラーをすることが成長の速度を早める。私も自分の授業動画は，年間２０本くらいはあった。そのままみんなで見ながら協議会をすることもあったし，ポイントを編集して短い時間で協議会をすることもあった。協議会のもち方は，穏やかに，いいところ探しが基本である。でないと気軽に授業者になりたがらない。授業者は自分のビデオを皆に見せながら自評する。ちょっと自虐的に笑いをとってもいい。自身のメタ認知が高まることが本質にある。参加者はそのビデオを見ながら，見て学んだことを発言する。このコメントはプラスメッセージなので授業者の意欲は高まる。基本的にダメなところは自分で自分を見ることで大体気づく。人から言われるとムカついたり，落ち込んだりするが，自分自身を客観視する能力がこれからの自身のキャリアで生きる。

私自身の授業を自分で見たとき，何とも言えない言葉遣いがたくさんある。悪い？独特？　実はそこは客観視できている。言葉遣いは大切かもしれないが，単に表面的なことでなく，**「毒語」**になっていないかをいつも振り返っていた。

「毒語」とは，生徒の成長を阻害する言葉ということである。

例えば，

「何回言えばわかるの！」と問い詰めるような**毒語**

「そんなことは１年生でもやりません！」と下学年と比較するような**毒語**

「じゃあもういいです！」と見捨てるような**毒語**・・・

言葉だけでなく，生徒と目を合わせない，笑いかけない，参加させない，必要な賞賛を行わない，生徒からの提案を無視するとか・・・**教室ネグレクト**

「教科の指導と生徒指導の一体化」においては，**「毒語」「教室ネグレクト」**も大きく影響する。